

伝承をテーマとした地域教材の作成  
—奄美大島を題材として—

21319030 野口 玲  
指導教員 葉袋 奈美子 准教授

地理 住教育 伝承  
奄美大島 ケンムン 防災教育

1. 研究の背景と目的

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災をきっかけとして日本各地で自然災害に対する危機意識が高まり、全国的に災害への取り組みが考え直されたものの、その後も自然災害による被害は絶えない。

古来より、我々はこうした災害に対する知識や地域の危険性を“伝承”という形で後世に受け継いできたが、これらの教訓を現代に活かしていない。その要因は、身近な地域に対する関心の薄まりや、住教育の不足にある。

また、中学地理の「身近な地域の調査」は、地域の地理的特徴を認識し、自らの住む空間を意識させるために不可欠な学習であるが、近年は地域との連携を取る難しさや学外授業のリスク、教材自体の不足などを原因として、「身近な地域の調査」に関する学習が薄まりつつあるという実態がある。

そこで本研究では、中学地理の「身近な地域の調査」の単元において、地域に伝わる“伝承”をテーマとし、生徒が楽しみながら取り組むことのできる住教育教材を提案し、その教育効果の検証を行うものとする。


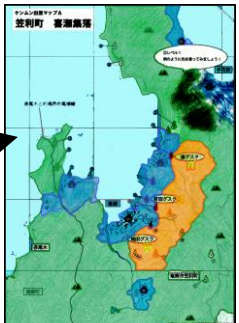
2. 研究の方法

ケンムンという妖怪の伝承が数多く残り、現在も広く信じられている奄美大島を題材<sup>1</sup>とし、そこから伝承と人々の住環境の結びつきについて考えるワークシートを作成した。さらに、学習教材が地域伝承は住環境を意識させるものであり、中学地理の住教育教材として有効であるかを検証するべく、アンケートも実施した。教材は住宅政策の課題の一環として本学住居学科の 2 年生に取り組んでもらった。

3. 学習教材の作成

教材は冊子とワークシートで構成され、その内容は表 1 に記す通りである。教材には、奄美大島の住環境を想像し、伝承と奄美大島で暮らす人々の生活とを結びつけて考えるために「奄美大島の紹介」「伝承の紹介」「伝承を伝える人々の話」「伝承の発生する場所をプロットした地図」<sup>2</sup>の 4 点を掲載した。ワークシートには冊子の理解度を測る設問を 3 問 (①②③) と、設問に取り組んでみての自己評価 (Q1)、教材に対する感想 (Q2)、教材への取り組み時間 (Q3)、最も時間をかけて読んだページ (Q4) を問うアンケートを行った。

表 1 冊子の構成と設問内容

P	見出し	期待する効果
	(右) 冊子表紙 	(左) ワークシート表紙、アンケート 
1	はじめに	ケンムンの伝承が奄美大島の人々の生活とどのように結びついているのかを考える導入として、全国各地に古くから伝わる伝承を紹介し、人々の生活と伝承は深く結びついていることを学ぶ。
2.3	奄美大島ってどんな所…?	奄美大島の特殊な気候やそれにより生み出された独自の生態系について説明し、自然と深く結びついた奄美大島の人々の生活を想像する
4.5	ケンムンってどんな生き物…?	ケンムンがどのような生き物なのかを学び、ケンムンが奄美大島の人々に今も広く信じられており、人々の生活に深く関わっていることを学ぶ。ケンムンが単に人に危害を及ぼす妖怪ではなく、何らかの意図を持って人前に姿を現していることを意識する。
6.7	ケンムンに出会った人々のお話	ケンムンに出会った人々の体験談を読み、ケンムンにどんな時に、どんな場所で出会ったのかというケンムンの出没条件を理解させる。
8-13	ケンムン出没マップ A 笠利町喜瀬集落 B 龍郷町瀬留集落 C 龍郷町浦集落	伝承が発生した場所を示した地図とその伝承の内容を読み、伝承が発生する場所の特徴を把握する。地図から地形を読み取り、住環境と伝承発生箇所的位置関係を把握する。
14, 15	ワークやってみよう!	冊子を読みながら①から④の設問を段階を踏みつつ解く。 ①: p5, 6 「ケンムンと出会った人々のお話」を読んでケンムンが出没する条件を問う問題。 ②レベル 1: 地図を集落、聖地、山など場所の使われ方によって分類し色塗りする問題。 ②レベル 2: ケンムンの出没場所をその場所の特徴によって分類し色塗りする問題。 ②レベル 3: ケンムンの出没場所の特徴を問う問題。 ③: ①②を受けてケンムンが出没する理由は何かを問う設問。 【参考】P14, 15 ワークやってみよう! 
16, 17	おわりに 参考文献一覧	教材を終えてどのような感想を持ったかを投げかけ、取り組んだ人々が自らの住む地域と伝承の関わりについても興味を持つことを期待し、この教材を作成するにあたり参考にした文献や Web サイトを掲載する。
<p>&lt;ワークシート・アンケート&gt; ワークシートは出没マップごとに 3 種類作成した。設問内容は 3 種類とも、p14, 15 「ワークやってみよう!」同一である。ワークシートの裏にアンケートを記載した。</p>   <p>ワークシート 笠利町喜瀬集落版 ②レベル 1 の模範解答例</p>		

4. 教育効果の検証と分析

4-1 自己評価と冊子の完成度

Q1 では中学社会科の地理的分野「身近な地域の調査」の目標・内容と合致するかを検証するために設けたアンケートに回答してもらった。与えられた資料の内容から地形や特徴を適切に読み取り、読み取った情報に自分の解釈を加え、論述することができたか、自ら率先して意欲的に学習に取り組む、その結果、奄美大島や地域伝承に対する興味を持ったかを問う設問で、1~6 全ての問いに対し、大多数の学生が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答をしている。このことは、教材が身近な地域の調査の単元の目標・内容と合致しており、利用可能な教材であることを示している。

4-2 設問の出題方法とテーマ

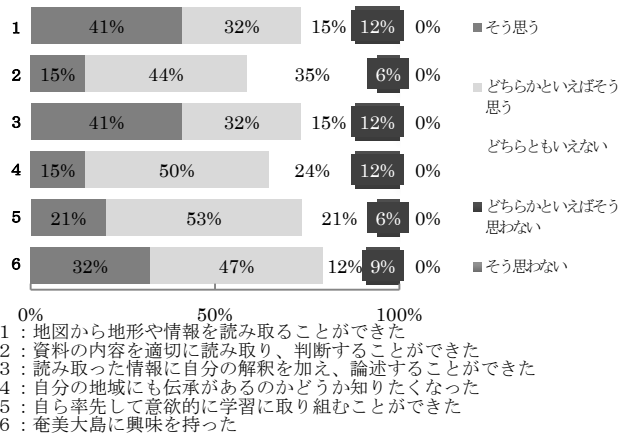


図1 Q1 取り組んでみての自己評価 (n=34)

4-1 感想から読み取れること

教材に対する感想(表 2)からは、色塗りという手法や伝承というテーマの有効性に関する意見を得た。

色塗りにより「統計だけでは得られない情報を視覚的に読み取れる」「考察・分析を楽しみながら行うことができる」という利点が見られ、これより色塗りという手法が地図の情報を把握するために有効であることが分かった。伝承に関しては、伝承をテーマに学ぶことで「地域の地理的特徴を知り、住環境を意識することができる」「他の地域の伝承を学ぶことで身近な地域の伝承にも興

表2 感想から読み取れること

感想から読み取れること(複数回答) (n=34)	数
伝承の重要性を感じた	5
適地適住の考えを持った	3
人間の住環境は水を得やすい場所にあるのだと感じた。	6
地図を学ぶことの重要性を感じた	1
伝承をテーマに住教育や地理教育を行うことに可能性を感じた。	13
内容が不適切だと感じる部分があった	6
人間の環境破壊とケンムンの行動に関係性を見出した。	9
ワークを通して奄美大島について初歩的な知識を得た。	13
ワークと冊子を通して奄美大島の人々の生活を想像することができた。	8
ワークを通して地形を理解することができた。	10
色塗りという手法がよかった	7
伝承と住環境の関係性に気付いた。	11
災害と伝承の関係性を感じた。	5
自分の地域の伝承について興味を持った。	10
先人の意図を感じた	1

味がわく」「地理や地図に苦手意識を持つ学生も楽しみながら学習できる」という利点が見られ、伝承をテーマに住環境や地理を学ぶことが有効であることがわかった。

4-3 冊子・ワークシートの完成度

設問③の回答は内容によって「環境破壊」「生活圏の重なり」「ケンムンの警告」の3つのタイプに分類ができた。

「ケンムンの警告」は危険箇所から人を遠ざけるためや、聖地を人から守るために人前に姿を現わすという本教材の目的に最も合致した回答で最も理解度が高いと言える。

Q3 より取り組み時間が中学の授業時間である50分以上であった学生が14名いた(表3)ことから、設問の難易度が高かったことが伺える。しかし「ケンムンの警告」回答者は比較的取り組み時間が長く、理解度も高い。

表3 Q3 本学習教材への取り組み時間

時間(分)	環境破壊	生活圏	警告
1時間以内	~20	0	0
	21~30	2	6
	31~40	0	4
	41~50	1	3
1時間越	51~60	2	3
	61~70	0	0
	71~80	0	1
	81~90	1	3
超過	91~100	0	0
	101~110	0	0
	111~	1	0
未記入	1	0	1
合計	7	21	6

1名未記入 (n=34)

取り組み時間が長い学生ほど伝承と住環境との関係に気付いていることや、Q1でも多くの学生が「地図から地形や情報を読み取ることができた」「資料の内容を適切に読み取り、判断することができた」等と回答していることから、冊子は奄美大島の住環境を理解するためにふさわしいものであると言える。

5. まとめ

現段階では、難易度や内容に関する改善点の方が目立っており、本教材が中学地理の身近な地域の調査における住教育教材として、即効的な解決策にはなりえないものの、学生に伝承と住教育を結びつけて考えるきっかけを与えたとと言える。

以上より、伝承をテーマにすることは住環境を意識させるために有効であり、手を動かしながら考えるワークシート方式の教材によって教育効果が得られることがわかった。

<註釈>

1 「伝承の発生場所が住環境の近辺である」「場所が明示しており、地図上にプロットできる」等の条件に題材を選定した。

2 1により選定された題材より「出現個数が比較可能なほどにある」「境界と付近、両方の系統の出現箇所があること」「ハザードマップとの関係性があること」を条件に集落を選定した。

<主要参考文献>

- ・1984年、海風社出版、恵原義盛著『奄美のケンムン』
- ・2011年、関西大学東西学術研究所出版、松井幸一氏、高橋誠一氏著『聖地・妖怪分布からみる境界空間と住民意識-奄美大島龍郷町を事例として-』
- ・1988年、龍郷町出版、龍郷町誌民俗編編さん委員会編『龍郷町誌 民俗編』
- ・2014年3月、海青社出版、須山 聡編『奄美大島の地域性 大学生が見た島/シマの素顔』